

江戸時代に於ける佛教界の肅正様相

井 川 定 慶

目 次

第一章 江戸幕府の對佛教政策の影響

第一節 佛教界の殷振

第二節 文藝復興と各宗學林

第三節 大乘佛說批判論

第二章 戒律復興運動

第一節 教界の墮落

第二節 天台宗安樂律騒動

第三節 眞言宗内の戒律運動

第一項 明忍 第二項 淨嚴 第三項 慈雲尊者飲光

第三章 淨土宗の復古運動

第一節 鎮西派

第一項 忍激 第二項 學信 第三項 徳本

江戸時代に於ける佛教界の肅正様相

第二節 西山派

第一項 南楚

第二項 昌道

第三項 助三

第四項 俊鳳

第四章 專修念佛と現世祈禱

第一節 關通一流

第二節 大我

第三節 文雄と敬首

第四節 批判

第五節 革新運動と官僧

第一章 江戸幕府の對佛教政策の影響

江戸幕府の宗教政策が佛教界に與えた影響は大きかつた。即ち基督教を禁制するための政策が佛教を保護する結果となり、佛教界は頓に隆運に向つた。然し外面は進展を示したが、其の反面には僧侶の遊惰を來たし教界の腐敗をもたらすことになつたのである。想うに恩恵になれて活氣を失ひ形式に墮したからである。ここに於て其の反動として護法の念のあるものをして振い立たせ肅正せんとする運動が展開された。また儒教の發達に伴ひ儒者よりなされる佛教批判もしくは排佛思想に刺戟されて大いに奮起する一面もあつた。

第一節 佛教界の殷振

徳川幕府の對佛教政策は直ちに諸國大名へ響き、美濃の森忠政を始め多くの諸大名は競うて寺領を寄進し或は寺院の修築を助成した。かくして佛教界は幕府及び諸大名よりの物質的の保護助成と宗教

對策の爲めの制度としての寺請證文により、寺院は好運にめぐりあうのである。『慶長見聞集』には「今や佛法繁昌の故に江戸の寺々に説法あり、老若貴賤參詣の袖つらなり群集せり」また『大學或問』に於て蕃山は「堂宇多きことを以て見れば佛法出來てより已來、今の此方のやうなるはなし」と述べ、田中丘滿の『民間省要』には

「夫れ寺と云は旦那の助力によりて立つの外に或は朱印地または御除地山林百姓地の持添等有て生れては取、死しては日々施物を取る事多し。在家に對して見れば何の不足も有るまじと覺ゆ。凡そ國々里々を見るに山林の少も立繁りたるは御林の外は皆神社佛閣の有なり。殊に神社多くは寺院の持ちにして唯一は稀也々々、別て元祿の御程諸寺諸山のいかめしく奢りたる時はなし、さもなき寺ども御朱印地給はり驛路の傳馬などは其の掟高成事、さも不及、所々の寺々の衣食住の結構皆金銀をちりばめたるが如し。それにつれ色々様々の驕り法外成事共のみならい忽て家來の面々僧官は不及言、中間若黨別しては小姓廻し杯は奢りは筆にも顯はしがたく、其の權威をかりて同じく群中に害をなし候事一々あげてかぞえがたし」

と極言し、正司老棋の『經濟問答秘録』には

「近世宗門起つて庶人を檀家と名づけ臣下同様にて一年の資供は租税と倅しく納入させ人を使うに公役に同じ」更に續けて

「人民は僧を見ること父母の如く國君と雖も民心をうることを僧に及ばず、一亂に及ばず、戰國の如く僧徒に屬して叛く事もあらん」

とまで云つてゐる。殊に一向宗の勢力について白石は次の如く述べてゐる。

「東西ともに本願寺は十萬石格式にて將軍家へ勤めなり。又將軍家の御代替りには一向宗残らず誓紙を仕て獻ず

るなり」

ところで寶曆年間の統計による一般佛寺僧侶の數は僧侶約四十一萬五千餘で淨土宗約十二萬一千餘、法華宗約八萬一千五百餘、東本願寺派八萬、西本願寺派約四萬一千五百餘等々

それが寛政頃には僧尼合せて約四十六萬九千乃至五十萬、それに對する全人口は二千萬餘とすると、二乃至二・五パーセントを占めてゐることになる。此の數字は果してどの程度實際に近かつたかは計り知れないのであるが江戸時代に於ける僧侶の賑々しさを知ることが出来るであらう。

而して靈像の出開帳、秘佛の開帳、靈場巡拜の行事も流行し、寺門の門前町が俄かに繁榮することにもなつた。開帳は寛文頃より漸次隆盛に向い、江戸に於ける淺草觀音、目白・目黒の不動、池上本門寺旅立祖師、青山善光寺の阿彌陀如來、其他信濃善光寺、洛西嵯峨釋迦靈像の江戸下り、敦賀原西福寺の諸上善人俱舍一處の鬼面緣起、同じ越前の吉崎御坊の鬼面の由來等が作り出されての、或は開帳、或は出開帳が行はれる毎に老若男女は争うて參詣したのである。

また靈場巡禮としては江戸を中心とせる六阿彌陀詣、四國八十八ヶ所巡拜、西國並に阪東に於ける觀音三十三ヶ所、秩父の廿四輩、淨土宗の元祖大師廿五靈場、七觀音、六地藏、十二所藥師、日蓮廿一ヶ寺等、半ば遊樂氣分も交り此等の風習は榮ゆる事となつた。

而して開帳に際して大提燈、幟等を掲げ或は珍しい造物をし門前町の繁榮と發達とはやがて遊樂の中心に變りそれに伴う弊害を取締る法令の發布を見る事になつた。(徳川禁令考、武江年表、巷街贅說等参照)

第二節 文藝復興と各宗學林

元和の寺院諸法度に僧侶の資格を定め、一定年限の學業を終えざれば「出世

僧」になれぬ様にすることが、僧侶の地位を向上せしめた。また『徳川實紀』にある如く本城に召して將軍が佛教の論義を聞かれたことも好學の氣を盛んならしめている。

西洋に於てはルネッサンスと相前後して宗教改革の運動が起り、また宗教より離れて新しい哲學が次第に發達したが、日本に於てもその氣配があらわれている。即ち或るものは大乘佛説を批判し、或るものは復古論を稱えて覺醒を與えんとし、安心問題に對しても異説が出て來るのである。詳細は次の章に於て各項別に記述するとして、主なものを擧げてみよう。

その例を日蓮宗派にとつてみる。日生・日尊が叡山に學びて後ち三大部の講場を下總飯高に開いたのは江戸幕府開創後幾何もなきが日生門下より中村談義、小西談林、更に京都に於ける松ヶ崎談林、本圀寺山内の求法院談林に派生して行くのである。

徳川幕府より特別の恩惠をうけた淨土宗にあつては芝増上寺の檀林を始め關東には逐次つくられた十八檀林が寛永元年頃までに制定せられて僧侶の養成に丁つたのであるが、檀林の學制には階級制度が嚴重であつて一種の型にはめ込まれるという憾みがあつたところから、英才にして自由に研究を進めたいものはここを遁れ出でるものもあつたようである。

延寶の頃、京都の獅子合法然院を復興した忍漱の如きはその一人である。別時念佛を盛んに行いつゝ一方に於て祖書の註釋講錄の他に大藏經對校という大事業を完了したことは確かに檀林に立て籠る學侶の到底なし及ばざるところであつたろう。

また淨土宗侶であり乍ら敬首や普寂は律院を開創しそこに立籠り乍ら他面では著述と研究に身を投じている。其

他、洛の京極了蓮寺の文雄は宗乘研鑽の外に音韻學に通曉している。

眞宗本派の學林創始は『承應閼轡記』によると寛永十六年十一月十四日の慶讃式からということになっている。ところで其の第二代能化西吟の講義に對して月感一味が勇敢にも異義を申立て興正寺門主准秀を味方にとり入れ更に幕府に公裁を仰ぐまでに運動を展開したことは注目に値するのである。また一如義の主唱者圓空は蓮如を批評しているし、貞享三年には『一往再論』三卷一冊を刊行している。そこに説く四十一箇條は要するに在來の眞宗の勸めている改悔文等の教化は一往義であつて再往眞實の信心とは凡慮の測る處に非ざる佛恩報謝など念頭にかけずして只だ稱名念佛すれば自ら三昧成就の德ありて不思議の境地に入ると説いている。是の説に對して泰巖は寶曆四年二月『眞宗紫朱辯』を著はして強く批彈し以て眞宗正義を顯正せんと力めている。

大谷派本願寺の學寮制は、本派より廿餘年遅れて寛文年中に始まつている。これが高倉學寮である。ここに講師及び擬講を置いて宗學を研修せしめた。幕末の天保六年になると其の結果が千六百二十二人にも及んだと雲華院講師年譜には記されている。而して西本願寺派の學林にあつては自由討究の傾向あるに對し東の學寮は極端に統制をはかつたのであるがそれでも深勵・宣明の二師の如く學轍を二つに分つた結果をもたらせている。

第三節 大乘佛說批判論

佛者の手にあつた儒學朱子學が僧門を離れて儒者の手に移つた。林道春は本朝通鑑を編纂して外國を卑しめ我國のみ尊しとなし隨て佛教の如きも排斥されることになつたのである。江戸初期にあつては禪宗の崇傳、天台の天海、淨土の存應等の偉僧があつて權勢の座にいたのであるが其れらの没後僧侶の權勢も低くなり神儒二道の學者が共に忌憚なく佛教を批判することになつたのである。また文藝復興による自由討究の思想が大乗非佛說を生むようになつたのかも知れない。

「富永仲基の佛教研究法」（龍谷論叢二五六號）で内藤虎次郎博士は評論されて仲基は『出定後語』『翁之文』を著して大乘非佛説を説き、服部天游は『赤裸々』、朝夷厚生は更に『出定後語』より統計十條を抽出して「摩訶衍未審十條」を出し、平田篤胤は『印度藏志』『出定笑話』を以て續けているが仲基の『出定後語』に殆んど論じ盡くされているというのである。

此の非佛説に對し淨土宗の文雄は『非出定後語』を出し、眞宗の潮音は『攔裂邪編』を著わして絶対佛説論を主張せるも結局罵倒し降伏せりといふ態度にとゞまつてゐる。

ところが此の仲基の大乘非佛説論よりも先きに淨土宗の律院開祖と稱せられる敬首のあることは注目すべきである。即ち『出定後語』出版の延享元年よりも九年前に『璽珞佛法大意』を著わしている。それはその下巻に次の如く記されていることで知られる。

「于時元文二年^{丁巳}春二月璽珞和上手書シテ見セ給フヲ寫ス
忍海 時年三十四」
その本文中に

「結集に二あり一に公結、二に私結なり乃至私結は大乘なり、大乘は内秘なり、故に結すべき理なし」
或は

「佛法に公法私法あり、公法は公傳する廿四祖の傳來これなり。私法は私傳す。文殊馬鳴龍樹の傳これなり。公法とは三藏なり。私法とは大乘なり」

と。大乘は釋迦金口の直説なりといふ在來の説を疑える『出定後語』に「持此說者且十年」という。してみると果して敬首と仲基と何れが先鞭なるや定かではないが、敬首が前掲の如く書いてゐることから見ると、或は仲基より

先きに大乘佛説批判の考えをまとめていたのではなからうか。

次に淨土宗の普寂徳門は江戸目黒長泉院の住持となつた持律僧であるが、その著『顯揚正法復古集』卷第一に「釋迦に大小の兩説ありて大乘は馬鳴龍樹の時に至り小乗皮相の弊を救済するに至るに大乘の秘密藏を開きたり」

とあるは明かに釋迦直説を非認している。徳門は華嚴學の立場よりして一乘眞實四分律論者であり乍ら其の研究道攻の極、大乘は釋迦金口直説に非ずと看破して在來の教權を打破しているのである。

第二章 戒律復興運動

第一節 教界の墮落

元和元年五月に豊臣氏が全滅したあと徳川幕府は同七月武家諸法度、禁中並公家諸法度と共に諸宗諸本山諸法度を定めて統制を期したのである。

就中寺院諸法度は一は家康の佛教信仰による保護たると共に、他に基督教防遏を目的とせられていたのである。其の結果僧侶は生活の安定を保證せられて大いに教學研鑽に精勵する利便を得て學究偉才を輩出することになったけれども、反面に於て安逸になれ墮落沈滞といふ悲しむべき事態をも露呈したのである。

當時の教界の紊亂を法令から窺うことにする。即ち『憲教類典』正徳四年三月の條に「寺社境内の芝居停止、遊女禁制」がある。修養道場たるべき寺社が遊蕩地化している一例である。また『徳川禁令考』によれば享保六丑年五月の條に「常州水戸三昧堂に罷在候日蓮宗所化長延は五月二十三日より揚屋に入り根津門前茶屋にて隠賣女と出合い預金子まで遣い捨てたりとて「三日さらし」に處せられたり」と記さる。

『禁令考』享保十四年閏九月廿五日の條に「武州湘江領栗原村道心者西岸というもの同村與四郎の女房に押而密會せし爲死罪になり」と破戒女犯を記している。されば心ある僧侶が内部にあつて戒律を喧傳し外にあつて幕府が膺懲せるも當然である。

徳川中興の英主と稱せられし八代吉宗將軍は華美を去り革清を叫んだが、其の「寺院へ仰出され候提書」（憲教類典享保七壬寅年）の第一條に

「外儀を飭らずして世風に同ぜず學業を勵まし放逸に無之晝夜佛道を行候事出家之本範也。然るに分際不相應之衣服を着し無量の道具を蓄え華美を好候ともが有之由 云々」

また同第七條に

「旦那妻子を誘ひ參詣之節饗應有之とも不及夜陰、尤住持之親類たりとも可准 云々」

とあるは寺院に在家のものを宿泊せしめての女犯を氣遣つたものである。寛文五年に諸宗一般に對して發布せられた條目五條の最後には

「一、他人者勿論親類之好雖有之、寺院坊舍女人不可_レ抱_二置之、但在來妻帶者可_レ爲_二格別_一（淨土宗全書第二〇卷五七二頁）」

とあり、妻帶者以外の女人を寺院坊舍に宿泊を禁じているのを想い會わすべきである。

それにも拘らず破戒女犯のかどで罰せられたものが多い。『徳川禁令考』によると寛永六年肥前國長崎興福寺監寺禪宗の玄光、同十二年佐羽羽茂郡淨土宗光善寺住持聞隆、享保三年七月廿九日蓮宗延命院日道、同院納所柳全上總國望陀郡新義眞言宗藥玉院秀慶らの名があらわれているし、辻善之助博士著『田沼時代』に安永録の記事とし

て安永六年八月廿三日小普請岡部徳五郎と共に煮賣屋茶屋門前茶屋を飲み歩きし僧の咎めをうけた話が出ている。

男僧の不律に對し尼僧はどうであつたか。尼僧そのものではないが尼僧姿をした勸進比丘尼や熊野比丘尼の不行續が『殘口の記』『東海道名所記』『人倫訓蒙圖彙』などに出ている。彼女は地獄變相を掲げ因果應報を説いて勸進して渡世していたものがだん／＼變化して白粉をぬり紅をさし三絃を鳴らして遂には色を鬻ぐこととなり、元祿から享保にかけて盛んに江戸を初め東海道諸所に横行し元文年間には武士と心中する者も出て幕府より嚴重に取締られたといふ。是れらは純粹の尼僧ではなく尼の姿を借りていたのではあるが佛法と關連せしめていただけに教界の墮落の一端を示している。

幕府としては僧風刷新肅正の取締令は續々發せられ寛政十一年に次いで文政十二年には四度も法華院諸僧の不如法を律するの道を示している。その一例

「近來猶又相馳候女犯破戒に及び罪科に被處候者も不絶、そのみならず利欲に耽り或は不相應之金子借入、濟方不實等閑に致し候輩も有之哉乃至、俗人に紛敷衣服并被布等を着刺市中茶店等に飲食を恣にし就中所化共法外之振舞云々。一宗一派遂評議相同様可致候」(禁令考所引『地方公裁錄』)

尙お文化文政の頃には僧侶が遊里に通うにその便宜に袈裟を着けず合羽を着用して外出をなせしにより、幕府は大いに頭を悩まし到底戒律を守り得ぬ者は師僧に警告して歸俗せしむる方法をとらしめたが、これも師弟の情實で徹底せなかつたようである。

また文化元年七十五才で没した中井竹山が松平定信へ出したと稱する『草茅危言』にも寺町僧侶の事として大坂中心にのべられている。(經濟叢書第十六冊所収)

「大坂中の寺院諸宗の僧侶戒律を破し放逸無慙の體たらく言語に絶したる事なり。平生寺中にて酒肉を貪り公然として青樓華街に入るは言うに及ばず。寺内または外宅に梵妻を貯へ生育を遂て男子成は是を徒弟と偽り後任に任ずる等往々有て官府よりも本寺よりも吟味無ば其勢を次第に擴張する事に成り、廉恥は地を拂いたり。往歲愚の門人たりし者の頼み寺の梵妻子をうみたりとて其住持の僧より檀越へ餅を賦りし事あり。或時三町人の一人山村與助話に其菩提所は先祖の一建立故、住持の入院退院を始め總て寺務迄も山村より指圖次第成りしに追々品替り今は住持甚だ權を取り、何事を申ても用いず、一向に手に合はぬ事に成たり。其故は實は四代續きの他家より相續に來り寺は三代迄實子相續の故也とて大笑に及びたりし。是等を推て其他一切の亂行を想い見る可し 云々」

尙ほ近來の不法共を數え上げ嚴罰のほどを述べて居るが、一向宗に非る寺にても隠し子相續という有様にて不犯僧は勘からず公然の秘密として梵妻を持ち而かも施物を貪つていた。「年忌の事」の條に

「凡そ年忌を怠れば寺より催促する者故中分以上に年忌を禁ぜらるれば寺より催促もならず」

と僧侶が布施物欲しさに年忌勤の事を催促するものと見てそれに反感をもつ儒者としての言であるが、更に

「年忌は必竟浮屠氏の物取に始まりたる事を曾て心付き無貴賤一統に先祖への追孝一大事の儀と心得たるは大間違、是を苦々敷思より斯く陳述する 云々」

と續けている。

また正司考棋も『經濟問答秘録』（卷十七傳道論）に於て

「大酒せざる僧は千僧に一僧、或は醉狂博奕淨瑠利小唄舞踊等能く上首にして甚しきは姦通して墮胎致させ母子

江戸時代に於ける佛教界の齷齪様相

共に死するものもあり、寺として十に八九は女居ざるはなく妄語戒を破り様々の妄語を以て愚夫愚婦を誑まし佛祖の遺誡一として守らず、衣食住の憚に長じ日に月に奉加を催し庶人を虐ぐ乃至豚犬の心を抱き「云々」

と云い授戒法要中にさえ濫行のあつたことを同卷十七授戒の條で

「洞家の江湖に授戒と名け血脈を拵えて居士大姉號を記して改名を授く。由之衆くの男女縁夫寡婦等其の寺に

同宿する事七日、是又嬌亂の媒酌にと云者也、古王代には尼といへとも寺宿を禁ず「云々」

右の中井積善も正司考棋も共に儒者で排佛論者にして或は誇張したところがないではないが上掲の處罰の事例と思ひ合はす時、全然誑言とは言ひ難く、其の墮落の一端を擧示したものと云わねばならない。

第二節 天台宗安樂律騒動

傳教大師、慈慧僧正によりうち立てられた戒壇院も江戸時代に入り貞享年中には全く衰微し妙法院眞如法親王をして『顯戒論闡幽記』の序に於て「元龜兵燹之後、戒壇雖存而絕無傳戒者一實缺典乎哉」と歎かしめてゐる。

此の時に當り妙立、靈空、玄門相續いで出世し祖道復興を志し安樂院を弘律の根本道場と定め盛んに律徒を養つて僧風刷新を計つたのである。

さて妙立は最初禪家で得度し南山流の四分律によつて二百五十戒を自誓受し自ら身を持すること頗る嚴正であつた。寛文十二年に改宗し比叡山に於て「四分兼學」を創稱したことが當時の山衆に容れられず異議者として放逐さる。依て洛東聖護院村に草庵を結び五十四才で没し北白川に葬られている。(弟子靈空の著草堂雜筆中妙立和尚行業記)

その弟子に靈空がある。廿七才にして妙立に教えをうけ三十四才妙立について沙彌となり學業を勵み遂に管領官大明院公辯親王の崇信を蒙り元祿六年大戒舊跡再興の令旨を賜るまでに至る。依て元祿十一年三月、山家の學則に

久修業假受があるのに準據して師の妙玄の稱えた四分兼學を當てはめんとし

「一向大乘は初修業一紀心藏山中の所行にして暫隔の相待戒なり。若し一紀を滿する時は式文の久修業によりて兼學の行持を爲す。四分兼學は汝等所行は菩薩道の開會に則る紹待の妙戒なり。故に籠山の大僧も紀滿後は安樂に來つて二百五十戒をうけて初めて久修業の大僧に成ることを得。是れ開山大師の本意に契える究竟の大戒なり」

と叫んで天台の僧侶に小乘二百五十戒を授けて以て律儀を正させ僧風を肅正せんと志したのである。ところが、從來からの山家派眞流圓耳らに「山家の奸賊なり」と酷評され反對されたのである。

そこで靈空は寛文三年安樂院を弟子の玄門に譲り自らは各地の行化の旅に立つ。ところが同四年に大明院宮より兼學の御條制を賜り師の主張がここに初めて貫徹することを得たのである。

然し山家派としてはなか／＼心服せなかつたが「等如、妙乘、專信、大勳先鋒被_レ中ニ毒矢ニ」(山家大戒興廢略縁起)とある如く兼小に反對した山家派は大打撃をうけ殆んど姿を消すことになった。想うに靈空の學徳共に秀でており、而かも管領宮の信望を厚くした爲めに小乗戒によつて天台宗侶の刷新を計らんとした念願がかなえられたわけである。

現在大津市坂本の安樂律院に保管せられている「安樂院并一派律院條制」に

一、籠山衆登壇受戒之節者安樂院より可改證明之旨輪王大王令旨にて候、登壇之刻安樂院輪番病氣等指ツカへ有之節者安樂院在山之大僧證明可有之事
(乃至)

右條件永々無相違被相守可被合法義相續者也

玄門

寛保三年癸亥七月

智幽（花押）

安樂院輪番大僧中

玄門は靈空の弟子である。天台僧の籠山衆が登壇受戒の際には安樂律院より一々小乗の四分律を兼學したという證明を貰ねばならぬという條制で靈空の望みが達せられている。

然し山家派圓耳律師らは心窃に能らずして新宮公啓親王に訴えて、安樂律は祖意に背けることを委曲言上した。偶ま安樂院三世玄門は死して中堅を失うたので山家派が勢を挽回し寶曆八年八月三日には一向大乘復古の制が管領宮より下された。是れにはまた安樂院四方律徒が服さず、泰巖比丘を筆頭に七人の惣代が江戸に下り幕府に直接訴願し寺社奉行所の門前にて縊死を遂げたるほどの決意を表している。

而して山家派の眞流は公啓親王の崇信を得て一時は一向大乘をもり上げたものの加擔する律僧とてなく繼承者も少數であつたのに對し、安永元年に公遵親王が代つて管領宮につかれるや翌日になつて安樂院の律制を再び小戒に復せしめられる令旨が發せられるに至る。

ところが三井寺の寺門派に顯道なるものあらわれ、此の日本天台の列祖の轍に合わぬ妙立靈空の學風に強く反對の態度をとり山門派の論に和して大いに復古道を唱えたけれども寛政七年五十二歳にて没して其のあとをつぐものがいなかつた。

以上の如く妙立によつて提唱され靈空によつて大成された小乗戒によつて大いに革新を計つた運動に對して山門派並びに寺門派の反對があつたにせよ、管領宮の力を得て小戒を以て革清することに成功したことを認めねばならない。

第三節 眞言宗内の戒律運動

古義の高野山、新義の豊山長谷寺、智山智積院が事相の外に性相學にも英才を出した程であるが、他面高野山に於て學侶行人の軌轢を續け慶長十一年、寛永五年、寛文四年、享保三年、元祿五年の紛議が著しいものであつた。

不如法の僧風が社會一般の墮落と相助長しあつてゐるに對し、戒律を以て自らも行持し他にも教え勸めて教界肅正を計つたことをあげたい。

第一項 明忍

『慶長日件録』によると師は山城槇尾山を去つて慶長十二年七月十六日明國に赴かんとしたが海外渡航を禁ぜられてゐるので其の志果さず壹岐に滞留したのであるが、刻苦勉勵の戒行の様相に對し地方人痛く感動をうけている。對馬嚴原滞留中には淨土宗海岸寺住持和順が其の行徳を慕つてゐる。ところが惜しいかな慶長十五年六月三十五才の若さで没したが、後世まで遺徳を傳えた見え、淨嚴、慈雲も其の舊蹟槇尾山を訪ねて明忍律師を偲び持律の決意を誓つてゐるほどであり、また没後九十三年（元祿十六年）にして遠く山城槇尾山より石碑が送られて命終の地に建てられ、其の台石は對馬侯の寄付であることを想合せると其の遺徳は永く垂れたことである。繼承者として良永、能圓、慈忍等出で其の徳風を慕い終に淨嚴によつて律をもつて一世を風靡するまでに至つたのである。

第二項 淨嚴

字は覺彦、顯密の學を兼ね究めていた。延寶元年自誓して菩薩戒を受け、次いで同四年二月には受明灌頂を再興した。當時の眞言一門において、教界の活動は沈滞し、戒律また萎微して振わなかつたので明忍のあとを慕つて山城槇尾山に登り自誓して小乗の具足戒をうけ爾後諸國を巡拜した。途次學徒の集り來りて菩薩戒を受くるもの一千餘人、三歸戒を受けるもの六十萬餘、その號名一時に高く傳えられた。時の將軍綱吉は子なきを

以て貞享四年には生類憐愍の禁令を布き佛寺僧侶に歸仰することが厚かつた折りしも淨嚴の高徳の程を知り元祿四年八月綱吉將軍は淨嚴の爲めに武州湯島に靈雲寺を建立せしめたのである。淨嚴は大いに發奮し同寺を戒律の道場としたが、同七年六月廿九日には關八州眞言律儀の僧統に推舉されるや師はいよいよ眞言律を公表し同年七月『眞言律辯』なる單行本を刊行し寺社奉行所にも差出している。(靈雲叢書解題参照)。その初めに

眞言律辯

(靈雲寺開山淨嚴律師述 苾芻雲
照校刻)

眞言律宗ノ事御尋ヲ蒙リ候間アラアラ注シ進上申候、戒律ハ諸宗ニ通ズル法ニテ諸出家ノ通法ナレド律宗ト名ルハ末世近世ノ出家多クハ戒法ヲ守ラズ候故無戒ノ僧ト持戒ノ僧ト紛レ候、是ニ依テ乃至 眞言律ト名乗申候と書記しているところから見ても當時無戒破戒の僧侶が漸々多くこれを緊肅せしめる爲めに持戒奉律の者を一人でも多からしめんと考え實動したことが察せられる。更に續けて

眞言宗ノ人動モスレバ戒ハ小乗ナリ、我等ガ學ブベキニアラズト申シテ放逸無慚ナルヲ我宗ノ法ノ様ニ存候。然ルニ弘法大師ハ小乗ノ戒律ヲ學ブベシト記セラレ候。況ンヤ大乘ノ戒ハ云ニ及バザル事ニテ候、殊ニ眞言法ハ天下ノ泰平ヲ祈ル法ニテ御座候ニ、佛祖ノ法ニ背キナガラ其ヲ行シテ驗アルベシト存ズルハ不相應ナル事ニテ御座候

右少シモ私ノ意ヲ交エズ佛祖ノ法言ニ任セテ記シテ進上仕候

元祿七年七月

靈雲寺覺彦 欽上

寺社奉行所

右の如く弘法大師が小乗の戒律を學すべしと仰せられたとして小乗戒律の必要を盛んに説くことになつたのであ

る。

想うに大乘戒は精神的にして形式を嚴格にせないことが遂に惡見に陥り墮落に流れ易くなるので、淨嚴は律儀な
る行いをなさしめるにはどうしても小乗戒の精細なるにつかしめねばならぬと考えたのであるが、それはまた飲光
慈雲も、天台の安樂律院一派も等しく小乗戒に依つてゐるのと相通するものがあつたのである。

ところで天台の山家派が小乗戒を反對した如く、淨嚴の運動に對しても反對はあつた。それは上掲の文中に「眞
言宗の人も動もすれば戒は小乗なり我等が學ぶべきにあらずと申し」にもあらわれている。此れに對して淨嚴が「弘
法大師は小乗の戒律を學ぶべしと記せられて候」と應ぜられてゐる。

即ち弘法大師遺誠（弘仁四年仲夏月晦日——弘法大師全集第七卷三二九頁）に

趣^ニ向^ニ佛^ニ道^ニ非^レ戒^ニ寧^ニ到^ニ必^ニ須^ニ顯^ニ密^ニ二^ニ戒^ニ堅^ニ固^ニ受^ニ持^ニ清^ニ淨^ニ莫^ニ犯^ニ、所^ニ謂^ニ顯^ニ戒^ニ者^ニ三^ニ歸^ニ八^ニ戒^ニ五^ニ
戒^ニ及^ニ聲^ニ聞^ニ菩^ニ薩^ニ等^ニ戒^ニ四^ニ衆^ニ各^ニ有^ニ本^ニ戒^ニ。密^ニ戒^ニ者^ニ所^ニ謂^ニ三^ニ摩^ニ耶^ニ戒^ニ、亦^ニ名^ニ佛^ニ戒^ニ亦^ニ名^ニ發^ニ菩^ニ提^ニ
心^ニ戒^ニ亦^ニ名^ニ無^ニ爲^ニ爲^ニ戒^ニ。

右の顯戒を堅固に受持せられたことについては七大寺年表、行集記、本朝高僧傳、眞雅の空海和上傳記、石山寺
古文書等に於て年月日に差異があるも、等しく南都戒壇院に於て四分律の具足戒壇をうけられていることを傳えて
いるし、眞言の祖師惠果阿闍梨も四分律の人であつた。されば眞言宗にあつて南都戒壇院に上り得度をうくると共
に五八十具の戒を受けるならわしが長く續いていたのである。

また眞言所傳の經典末疏を見ても小乗の戒律は差えないようである。『瑜伽論』に戒の大小は心の期するところ
といい、善無畏の大日經疏には本所受戒を受くるに非れば眞言に入る可からずとあつて、小乗戒は排斥せられてい

ないのである、また事實徳川中世まで南都の戒壇院に登つていたのである。（故長谷實秀東寺大學教授談）

かくて淨嚴によつて纏められた四分律は其の後實行者も講究者も出て一時は盛んになつた。それが稍々影を潜めようとした時に慈雲尊者（欽光）が出て有部律を以て四分律に代へ教界沈滞墮落の教界に對し釋尊在世そのままを目標とする正法運動が起されるのである。

第三項 慈雲尊者欽光

師は享保三年播磨に生れ、幼にして儒教殊に朱子を読み後ち河内法乘寺貞紀について得度し更に南都に入りて顯密の學を究めたが四分律の五百結集の文を見て大いに感奮し河内に歸り野中寺に於て沙彌具足戒をうけ益々研鑽を重ねたのである。ところが當時の教界にあつては幕府の咎にあつて處刑を受ける破戒僧が多かつたので此れを常道に戻すには正法律を守らしめる他に途がないと決意し實動に移したことは『根本僧制并高貴寺規定』（欽光著）に記述するところによつて窺ひ知られるのである。

そこには大は衆法、界の結制、戒の受捨、懺の輕重、安居要期、恣説、治擯等より小は心念法衣鉢、坐具、祇支覆肩等及び日用の瑣事に至るまで悉くその弊を革正することを期している。かくて師の教化によつて感化をうけたものが多く、就中弟子の親證は最もよく師命を如法修業し體を攻めたので廿四歳の若さで夭折している。

欽光は更に正法律の興隆に力を注ぎ延享四年には攝津有馬の桂林寺に移つて其の地方を教化したが、風紀を正しくするには先づ其の衣裝からという見地から袈裟を正しいものにするを考え且つ實施した。即ち唐宋以來袈裟の裁製が正式に違つているし、その着法も亦正式でないことを慨き、袈裟の裁製を研究して方服圖儀二卷（刊）と廣服圖儀（寫本）とを著わしている。而して寶曆の中頃、師四十餘歳にして發願して如法の袈裟千衣を作つて廣く施し袈裟の模範を示さんと企圖したのであつて爾來師が示寂まで四十餘年間教化の傍ら尼僧を勧めて盛んに正しい

袈裟をつくり寄進せしめることにとめたのである。

長谷寶秀師の蒐集された慈雲手控寫本五冊を拜見したが、そこに次の帳簿があつた。

一、法衣發願裁製之簿

二、千衣袈裟之記錄

三、千袈裟裁製之簿

四、千袈裟福田簿

五、御袈裟千衣之ひかえ

と題號は各別であるが其の内容は千衣の番號順を控えたものである。想うに長年の間に書き續けていつたので題名はその折に思いついたまま記したようである。五冊の内容であるが其の出來上つた袈裟を一々監査し記錄しており、施主、年月日、受持者名、針の縫様の種類、即ち馬齒縫、鳥足縫、編葉縫の三縫様を區別して手控えられたもので第五冊の中ほどまでが飲光の自筆であつた、今參考の爲めに第一號衣と第千衣とを抄寫しておこう。

(第一冊) 法衣發願裁製之簿

第一衣 梵字 (檀那波羅密)

木蘭色安陀衣 帖葉五條一長一短馬齒縫

財體紵布中量長六尺八寸餘廣四尺二寸半餘

助織

慧日式叉尼

同

義文求寂尼

明和三年丙戌正月十六日奉施高井田寺

現前僧伽

和尚位 飲光受持

(第五冊) 御袈裟千衣之ひかえ

第千衣 梵字(一字金輪の種字)

蓮糸織

十九條大衣割截馬齒寛政元

年酉年

慈雲大和上様御護持 宗珠裁

慈雲尊者千衣御袈裟御成就の御願心

文化二年二成就竟之

是によると飲光は千衣に滿たずして死し、第千衣はその歿後の翌文化二年に志を繼いで成就せしめたことがよみとれるのである。師の感化が如何に深厚であつたかを察知することが出来るし、此の裁縫に關與した尼の數は百五十餘人を算することが出来るのである。

さて師は先きに生駒山に幽棲して道行益々堅く徳化四方に渡つたが寛政十年には河内高貴寺に居を移し築壇結界していいよ持戒堅固であつた。幕府も其の高徳なるを賛し同寺を正法律の本山となしている。受戒の道俗は實に一萬人を越えている。ところが文化元年十二月廿三日京都阿彌陀寺に於て八十七歳で寂を示す。

是れら眞言宗内の高僧による持律運動は誠に讃歎すべきではあるが教界の墮落は容易に止まず唯だ一時の佛教顯揚、一部の道俗共鳴者を得たというに過ぎなかつたというのは遺憾である。

第三章 淨土宗の復古運動

第一節 鎮西派

徳川時代の淨土宗寺院は徳川氏の香華院は勿論、さもなくとも特別の恩恵に浴したことが僧侶をして増上慢にし、而かも華美に陥らしめることになり律儀頑廢を來たすことともなり、心あるものは奮起し肅正運動をおこすこととなつた。また本山や檀林にあつて官僧として振舞うことをきらつて地方の平僧となり、宗祖の昔に還つて眞の念佛僧として教化に従事せんとするものがあらわれて來たのである。

第一項 忍濃

江戸芝に於て宗學を修めたのであるが、その師萬無が知恩院（三十八世）に晋董するや江戸より關西に上り京都東山鹿谷の元祖教化の故地近くに法然院を開き中國廬山の白蓮社の結制にならつて別時念佛の道場を山内の金毛院に別建した。而して六時禮讃を嚴格に行じて僧風をひきしめると共に宗乘を復興せしめる爲めに廣く祖書を求め集めて研鑽に便ならしめ更に大藏經對校という大事業をも發願して釋尊の遺教を正しく理解せんことを念願した。

尙ほ『別時念佛三昧法諺註』を版行するほど念佛實踐と宗學に熱心であつて、幾多の典籍をも上梓して教學に寄與するところが多かつたのである。

忍濃はその師萬無が知恩院大僧正であつた爲め徳川幕府との交渉も容易であつた便宜から寺域領田を得、法然院の寺觀を整え、人材の養成、事業の完遂に事缺かぬだけの資材に恵まれたのはあるが、他の香華院の如きにならず華美を去り専ら質素閑靜にしてひたすら稱名し乍ら宗學も修め宗祖への復古の志を實動して行つたのである。

萬治二年出版の『風流可笑記』には

江戸時代に於ける佛教界の齋正様相

「當代の坊主共はただ賤しき百姓町人ばらの子孫の身のすぎはひとして形を替へたるまでなり」

とも

「當世の出家は何とした智恵もなく行もかひなく況んや道心のこと思ひよらざる只欲を好み知足を専らとし榮華におごり飲食を恣にする 云々」
と痛罵しているのに對抗していたように考えらる。

忍激は主として麴谷に籠り居て自ら先頭に立つて教學の振興と稱名、律儀を實行していて外巡せなかつたから各地に教化が行届かなかつたけれども其の徳望を慕つて來集するものが多く、それらが地方に歸つて忍激の學風と流儀とを傳播したものである。就中三河、近江、大和には其の徳風をうけついで末寺が出來た。殊に三河の貞照院の如きはもともと捨世派であつた寺が忍激の流を汲んで律院となり爾來末寺の禮をとるようになったのである。

第二項 學信

忍激の歿後に學信が出てゐる。享保七年伊豫に生れ湛慧和上について菩薩大戒を重ね受けてより忍激の遺蹟たる獅子谷法然院に聘せられて住職となり、忍激の志を繼いで廬山流白蓮社念佛を大いに復興せしめんとしたが、僅か五ヶ月にして思うところあつて諸方巡化の旅に出たのである。晩年には郷里なる伊豫松山の長建寺に住せられんことを懇望せられた。固辭し難く住職する事になつたのであるが、それに先立つて檀家の送葬追善法要には一切行かず、専修念佛一行に徹することを檀信徒との間に約束しておいたのである。死人への引導よりも生きたる人への教化を主眼としたのである。『草茅危言』の「送葬の事」「年忌の事」項で僧侶の布施貪欲有所得の念を痛罵せることへ對抗している感を深うする。

師はまた松山城主の請によつて香華寺大林寺を董するや愈よ僧行を正し戒法を嚴守せしめ不軌のものは何人とい

えども忌憚なかつた。松山の有力なる家出身の尼に非法があつたことを知るや法衣を脱がし門前に於て擯斥の法を行じたといふ。

師はまた宗祖の昔より更に進んで釋迦正法の古に復せしめんと志したことは聊か慈雲・飲光と似通つた戒の復古宿望を抱いていたが、教學の方面に於ても復古を志し、大藏經を閲覽し諸宗を遍學しその歸結するところは厭穢欣淨、念佛の一行三昧を目指したのである。そして近くは忍・激、遠くは宗祖の昔を偲ばんと勵んだと見るべく、持戒と念佛との二つを強行せる點は、また關通に類似したところも多いのである。（遺弟慧滿の文政四年輯録の學信和尚行狀記参照）

師の教化を受けた松坂の信問（淨全十八卷 三一七—一八頁）は關通と對比して關通は惡人にも初めより本領を眞向にとき因果を説かなかつたが、學信は智人には初めより説けども惡人には漸次因果門より引き入れて願生淨土の念佛心を發さしむる様に計りたりと其の差異を擧げている。

また學信の傳記中に現世祈禱を排除していない點も關通と異つてゐる。想うに松山太守の香華寺に住していたから隨他意から排除せなかつたのではあるまいか。

第三項 徳本 出世僧の教化が沈滞していたのに對し、平僧にして信仰篤く而かも活躍したのは徳本及びその一派である。

徳本は寶曆八年紀州の生れであるが寛政五年十月には戸を閉ざじ釘付けにして獨り別時念佛會百ヶ日を修した。然し未だ正規の出家の手續きを経ていなかったのである。ところが此の念佛行者の信仰談を聞かんとして各地より結緣別時念佛會を開筵したいからといふ希望者が多く申出ている。藩主紀州侯よりも懇切なる招きを受けてゐるが

一化が終ると通れて行脚に出るといふ洒脱ぶりである。享和三年十月京都獅子谷法然院を訪ねて剃髪して正式に出家の姿となり續いて江戸へ下り宗戒兩脈布薩法式の相承別開を終え再び獅子谷に戻り別時念佛に勵んだのであるが、大和當麻樂院並に紀州西山派の梶取總持寺より特招をうけ晩年には紀州侯にも召される等その感化を求めた者が多く、其の中には三河の律院九品院を興した徳住を始め數多くの偉僧がいる。(行誠著徳本行者傳參照)

偕て徳本が正式の僧侶の資格を受けない前に各地から招かれて別時念佛を修行したことについて一言しておく。

『徳川禁令考後聚』卷三八に「俗人十念口傳之儀數人に致傳授、禮物を取候ものお仕置の事」という見出しで寛延四年三月御仕置之例として

大坂北久太郎町五丁目 大和屋 宇右衛門

此宇右衛門儀怪敷宗門には無之候得共、俗人身分として十念口傳之儀數人江致傳授、禮物を取候儀不埒候、然共以來可相止由申之付其旨證文申付佛壇佛具取上げ輕追放可申付哉と大坂町奉行相伺

御 差 圖

重 追 放

というように俗人にして十念傳授は禁ぜられていて處罰をうけたものである。徳本は出世以前に随分と教化を行つたのであるが、徳本は禮物を取ることが目的でなかつたから咎められはせなかつたが、京都法然院にての剃髪につづいて江戸へ下つての兩脉相承は此れら俗人の不正者と混同せられることを恐れてのことであろうか。

この十念傳授は鎮西派で行う五重相傳の隨一であつて既に元和條目第五條にて「對在家之人不可令相傳五重血脉事」とあり、その第二十六條には「一向無智之道心者等對道俗授三十念勸男女二與血脉誠以法賊也、自今以後堅

可停止事」とあるが、寛文十一年の檀林會決議定書の第十五條にも在家相傳を禁じている。即ち

「附於ニ在々所々ニ隱遁上人或道心者對ニ在家ニ五重令ニ相傳ニ之聞有之候各強可レ有ニ僉議ニ事」

と重ねて禁じているのである。

ところが淨土宗寺院過去帳に或は墓石面に五重傳授の證としての譽號が付せられているのを徳川中世以後になると見上げるはこの在家五重傳授の禁がゆるやかになつた爲であらう。

第二節 西山派

文藝復興の氣運は自由研究を重んぜしめ古來の口傳を軽く扱うようになるのである。而かも同じ淨土宗にあり乍ら鎮西派が徳川氏と縁故が深く何かにつけて有利な地位に押上げられていた。かくて群馬の吾妻川東善導寺、越後の高田來迎寺等の大寺が鎮西へ對抗することとなり一方では鎮西派の學林は制定以來淨土祖師の疏鈔解釋が盛んに行われ西山義はそれに追付くことが出来なかつたようである。それでも宗學の興隆を計つた碩學も續々出ている。

第一項 南楚

就中紀伊梶取總持寺南楚（寛文十一年寂）は宗義を長感にうけ天台學を天海に、禪を圓耳に淨土鎮西義を靈巖に聞いて而かも自家西山義の所信を唱導している。ところが師は在來の宗學者が古來の傳承末鈔にのみ拘泥する狹量を歎じ博學の機能を傾けて『觀經疏重笠』十三卷、『具疏記』八卷、『大經義苑』七卷、『論註隨聞記』五卷等の著述をなし優秀な門下が多く集つたのであるが、師は自由討究を重んずる立場にあり殊に鎮西の靈巖に淨土義を聞きてより益々鎮西義に入り西山義の特色を失われたのである。

ここに於て西山派祖以來の祖書解釋をうけつぐものでは此の南楚の鎮西かぶれを嫌うものもあらわれた。

第二項 昌道

竹林の昌道（元禄十三年寂）は西山派の中の西谷流、深草流の兩流をうけて派祖西山國師の昔に還

さんとし、二流の調和を企てたのであるが今一步進めることが出来なかつたのである。

當時恰かも天台僧正の勢力が益々大を示し西山派にあつて天台の志をうけて學ぶものが多くなり天台西山兼學の寺院がふえ天台が漸次西山派を侵かして行くような現象となつたのである。そこで天台より引きはなして淨土義を立てんとするには教義を鎮西に頼よることとなるし、戒儀は鎮西流によるか天台に依つて圓頓戒を相承するといふ有様であつて、洞空の如き學匠でさえも西山家の戒は天台の戒そのままであると發表する程になつていた。

第三項 助三

(元禄十六年寂) 南楚流の教旨信仰にも、天台流の圓頓戒そのままとする洞空の考えにも満足せない助三が出現している。師は遂に『圓戒補助儀』三卷を版行している。是は當時の西山教界に一大ショックを與えている。一世の學匠洞空宗覺は早速駁撃を加えた。助三の弟子に阿三が有て東に下り幕府の公裁を仰ぐことにしたところが公裁は助三に有利の判決となり西の本山光明寺の惠雲は脱紫退山となり一山の評議によつて世代より削除さる。また主敵洞空らも脱衣追放に處せられるという事になり助三の復古運動は功を奏したわけである。

第四項 俊鳳

(天明六年寂) 派内より學徳共に高く推賞せられた俊鳳は上掲の鎮西派學信より圓頓戒をうけ其の著述に選擇集の末註である『同順正記』があるが、西山編古編等數部も公表しているが、師は鎮西流を唱導し「善導古水の義に稱はざるは國師(西山)の説といえども採らず」とまで宣言しているのは注目すべきである。

然し西山義の復古運動が全然なかつたわけではない。幕末に出た亮範は西山光明寺に住持したが、師は『四帖疏管規鈔』、『選擇集管規鈔』を始めとし曼陀羅事相の法門といふ西山義獨特の著書のほか、圓頓戒に關しては『圓頓戒集要鈔』をも編し復古挽回運動に努めたが其れに賛同し教えを受ける者も多かつたのである。また三河の音空には著書も多く西山義復古は漸く命脈を伸ばすことになつたのである。

第四章 專修念佛と現世祈禱

第一節 關通一派

關通は元祿九年四月八日尾張に生れ十六歳にして江戸に出で其の翌年より祐天大僧正に就て傳宗傳戒、享保元年瓔珞庵敬首和上より菩薩戒をうく。祖書を閱讀し日課稱名三萬邊を勵む。享保八年春、歸郷の途中箱根の關所を通るに際し符券の必要から「生死輪廻の關所を越すには本願念佛の符券さえあれば關を通られる」といふ托事觀によつて自らの名を「無礙關通」と改めたという。後ち京都に上り靈潭和上を訪ね更に菩薩戒を重受し自行化他に勵む。時に門人に示して曰うには

「今時通世出家の人多くは道念銷亡して佛祖の教誡を護らず、世上の無爲に驚かず、正業を廢して空しく光陰を送り遂に此度の往生を誤つに至る。我れ此れを悲しみ思ふによりて所々に道場を營構し遁世出家の人々を集めて共住せしめ、一期稱名利殖させしめん爲め 云々」

と。かくて享保十七年郷里西方寺に不斷念佛を開始し以後所謂る所々の道場を建立しているが何れも六時勤行總上堂、常行念佛番次出勤、是を定式となして嚴重であつた。翌十八年此の尾張國中一色の西方寺を如法の律場となし元文元年には圓成律寺と改稱しているが、そうする爲めに國廳へ七十二度、本山へ三十六度往反して漸く律場をなし得たという。其の間少からざる反對があつた事が察知せられる。此の律場制定に就ては敬首の指揮を仰いで持戒念佛を昂揚して念佛義を傳えつつ教界の刷新肅正を考えたからである。而して志願成就の後ちには寺務は避けて自行精勵するのみであつた。ところが師の徳を慕い或は傳聞して來集する道俗は日増しに加わつたけれども伽藍建立等の念佛以外の餘善は勧めず唯だ念佛の數遍をのみ説いていたという。

當時の淨土宗門は徳川家の權勢をたより各本山では堂塔の建立または營繕が行われ、民間に於ても善根として造營が勸進されまた事實よく寄進せられたものである。そこを經濟問答、秘録僧道の中に「今の僧は方便と云つて寝ても起きても財を貪る工夫するなり」と僧侶の貪施ぶりを擧示するのである。

此れに對し關通は宗祖の昔、宗祖の心行に還さんとし、往生以外には何の報いをも希求するを許さず「一聲の稱佛も更に餘報のためにせず皆悉く極樂に回向せん」(行業記卷上の自行發願文)と述べ念佛を以て現世利益の祈禱に用いる事は師の極力排斥する處であつた。

師の著述にかかる『本願念佛勸化本義』には「近世もろくの現世のことを勸示し無智の男女をしてただ厭欣の誠心を失はしむるのみならず云々」と書き出し

「實祚延長武運鞏固國安泰の祝禱は四恩報謝で是釋門の通法なれば闕く可らず乃至然し是れ宗門の別軌に異れば隨自意の正意と混淆する事勿れ」

と一往通法としてい乍ら眞實の意中の祈禱排除であつたのである。即ち

「眞實勸化門の日は別軌の故實に基き願行共に一向專修なるべき事は淨宗一家の公談也。重て乞う祈て勸むる事勿れ勸めて祈る事勿れ」

と重ね誠めて勸化本義の結尾としてゐる。然らば何故現世祈禱を排除するかといふに本義卷上に

「一には惣じて厭穢欣淨の宗風に合はざるが故に。二には別して至誠深心廻向の三心を失脚するが故に。三には決して宗體宗判に乖違するが故に」

と廢立以正の立場をとつて淨土宗の根本義を立證せんと力め、十個の章疏、十三個の祖文をも引用して極論してい

る。この勸化ぶりを世に「關通流」と呼び師の在世時より一種變つた教化法として認められ師自らも許している。一枚起請梗概聞書卷一に

「淨土宗の中にも何某の知識は心經を讀ませ施餓鬼をも修し又は祈禱の爲に百萬遍をも勸め現世安穩にも回向して後生善處を願求すること誠に目出度き教とこそ云うべきに一向に往生の爲許りと片向路なるは關通一流の勸めに誑かされたる偏局者と名をや立つらん」

と關通流の綱領を明記せるにても察せらる。

ところが此の化益に靡くものが殖えたのをそねんで師の過失を誣て書き連ねるもの、國廳に讒訴して却て閉門の禁をうけるものもあつた。

それでも關通は迫害を物とせず元文元年三河の光明寺に、寶曆二年の頃には美濃岐阜の本誓寺に、明和四年には近江の宗安寺に於て尙おも反撃の氣風があつたことは

「多念の口稱をのみ偏に勸めて破邪顯正分明なりしによつて他よりこの事を恨み忿怒の餘り蜂起して師を迫害せん」とまで催しける」

と行業記に傳うるとほりである。

師は更に京洛に入り寶曆八年には七本松に轉法輪寺を建ててゐるし、加茂川の西三本松に於ても專修勸導をしてゐるが、當時京洛滞留中の學僧の中には上記する關通の勸化法に對して反感を抱くものも可なりあつたのである。

第二節 大我

寶永六年に生る。幼少より内外典を學び廿三歳（享保六年）にして眞言宗より淨土宗に轉じたが當時の江戸に於ける名僧と稱せられる者が競つて名利を好むを深く慨歎し神明に誓つて清い生き方を選ばんとし

て鎌倉光明寺稱譽眞察を頼より共に上洛し、知恩院四九世の室に仕えたが、その眞察大僧正の寂後は黒谷光明寺に身を寄せ専ら大藏經の閱讀に日を送るうち迎えられて山城八幡の正法寺第廿二世を董す。この寺は名古屋徳川家と縁故深く寺領よりの米收の多き肉山である。ところが寺務の繁雜なることは大我の隱遁の志と大いに齟齬するところから辭意を洩らすも聴き入れられないので、師は一考し狂體を裝うて辭去し、岡崎に隱居し乍ら増上寺定月大僧正と詩文を交わすことになつたのである。

ところで此の隱遁を好み名利を避けた清僧と見らるる大我は當世を救わんとして革新肅正運動をしている前記の關通や普寂徳門を嫌つたのである。關通に對しては專修祈禱論、扶宗論を著わして反駁し、普寂徳門に對しては性惡論、遊芝談を作つて盛んに貶している。何故かような舉に出たのであろうか。

惟うに關通や徳門は名利を避けて活躍し律院などを設けて大方の歸仰をうけている事が、大我から見れば實は名を避けたやうで却て名聲を博しているではないかというのではあるまいか。

また現世祈禱を却けて專稱名號に徹せんとした事に對して反感を抱いたやうでもある。大我は檀林鎌倉光明寺や祖山知恩院という幕府直轄寺や御三家隨一の香華寺たる八幡正法寺に住したことが名利を離れ乍らも不知不識の中に幕府安泰を心の中に抱いていた官僧である。そして正法寺の本山である百萬遍知恩寺の百萬遍祈禱や同寺所傳の利劍名號の御利益を無に出来なかつたやうである。されば專修祈禱論の中にもその奥付にも「利劍名號」を付載している。また武運長久を祈願し徳川歴世の恩顧に報いんとしたことであらうし、また江戸幕府が新義取締令を出している趣旨にも添う爲め、關通や徳門の嚴正な現世利益を避けて專心稱名するといふ説を、幕府に協調して所謂「新説」として排除せんと蹴起したのではあるまいか。

大我は名利を避けて隱遁したけれども其れは厭離穢土欣求淨土即ち往生願望が切なるが爲めでなく、繁雜なる世務を嫌惡して詩歌閑散の境涯に隱れる世間一般の隱遁者に過ぎなかつたのではあるまいか。かの世を率いて迫害にうち克つて宗風挽回せんとした關通の積極的に富んだ犠牲運動者とは相容れなかつた筈である。

第三節 文雄と敬首

文雄は元祿十一年丹州桑田郡濃野村に生る。僧谿無相の別號がある。初め京都了蓮寺誓願について内外典を習い音韻學に秀づ。文雄の著に『專雜甄陶篇』がある。此れは弟子の文龍が師僧を追薦の爲めに版行したもので奥には

「明和己丑八月得 故上人之備考而謹謄寫之 文龍 叩 薦故上人七回報恩以謄寫焉」

と記されている。文雄の自跋には

「不_レ精_二學術_一乖_二戾_一專雜_二同_二軌_一於異流他門_一（乃至）一出_レ則茶毒暨_二棄生_一今京師之間法俗喧囂稱_レ之可_レ不_二懔慨_一哉云々」

とあつて專修と雜行との區別を明かにし雜行雜修の解釋を如何にすべきかが目的である。而して關通一流の雜善排除は當を失して極端に偏し寧ろ異流他門に類同せる邪義なりと貶している。

ところで知恩院山内入信院所藏の文書中に「關通不退妄教化」と題するのがある。聊か繁瑣なるもあえて次に書き出し文雄の所説と相似通えるを示さんとする。即ち

- (1) 一、今時之淨宗本末諸寺元祖ノ宗意ニ違スルト云フ
- (2) 一、諸寺ニ觀音地藏之餘尊ヲ立ノフ、元祖鎮西等之法敵ト呵スルフ。
- (3) 一、在家之愚夫ヲ勸メ觀音地藏其他諸尊ヲ悉ク捨サスルフ

三州遠州邊ニテハ河ヘ流シ候者多有之候。

(4) 一、本末ノ寺院ニ施餓鬼頓寫懺法諸法要一切聲明等悉皆雜行、元祖之掟ニ違スルト阿スルヲ

(5) 一、淨宗知識ト稱スル者念佛勸進ノ者元祖ノ掟ニ背キ正義ヲ失スト云ヲ

(6) 一、靈位回向現世護念ノ爲ト稱スル念佛ハ一向利益無之ト云ヲ

(7) 一、寺院靈牌ヲ立薦福トス皆宗意ヲ失スト阿シ在家ヲ教エテ先祖ノ位牌ヲ河ヘ流サシムルヲ

(8) 一、戒名ヲ呼或ハ書クヲ甚ダ阿スルヲ

付 寺院ヘ戒名ヲ書キ廻向ヲ頼ムヲ妨グヲ

(9) 一、淨土宗ニ一向祈禱ノ沙汰曾テ無之、現世ノ爲ニ少分心ヲ寄スルハ皆元祖流ノ念佛者ニ非ズト阿スルヲ

(10) 一、祈禱論等世ニ行ルヲ聞キ官□通シ賂賁運リ欺テ流行ヲ妨グルヲ

(11) 一、古來勅命ニテ念佛ヲモテ災疫□除等ノヲ云消スヲ

(12) 一、幡隨院方丈等ノ高德ヲ嫌ヒ在家ヲ集メ貴人ニ對シ甚ダ惡口罵辱シ宗旨ノ安心ヲ不知ト阿スルヲ其ノ上又其高

德ニ拜謁ヲ求テ欺クヲ

(13) 一、金銀ヲ不思儀ニ自由シ貧乏ノ在家老婆愚俗ニ勸メ入黨ヲ成シテ道路ニ名號ヲ弘メサシ虛談ヲ傳テ已ガ類ニ入

ルヲ

(14) 一、貴人ニ立入緣ヲ求テ已ガ勝緣ニスルヲ

(15) 一、是迄ハ諸國說法ノ所多ク禁ゼシ說法停止ノヲ

(16) 一、寺院ニテ亡者ヲ大切ニシ引導ト稱シ佛前ニ出シ法要ヲ爲スヲ揮無益非法ナリト阿スルヲ

(17) 一、在家へ教へテ死人ヲ庭端ニ取出サシムルヲ

(18) 一、在家へ勸テ佛壇ヲ廢サシムルヲ

(19) 一、父母ヲ養フヲ捨テサセ少婦女兒ヲ勸テ尼ニナシ所屬ニスルモノ都鄙甚ダ多シ父母等、甚恨ムル者多キヲ

(20) 一、說法ニ自分佛ナリ佛ニ錢ヲ投與スル理無之、甚ダ無禮ナル志ヲ起シテ施ス者心有ラバ房へ持參レト勸ムルヲ

(21) 一、說法ヲ聞ク者多可申念佛悉皆無益ニ勸メ來ルト恨ル者多キヲ

凡ソ法ヲ荷ヒ衆ヲ領スル僧侶ハ寺院ニ依テ□□釋尊ノ遺法内法軌則ヲ以テ進退セザレバ別ニ依リ處ナシ、茲ニ依テ隨分律儀ヲ守ルベキハ祖ノ教ヘナリ。六齋施食放生齋儀建立薦七追福度生說法種々方便ヲ善巧シテ諸天神祇餘尊佛外護ヲ求メ世不平ナレバ法文住セズ、是ガ爲ニ國家安全宗教廣布ノ祈禱ヲナスコトハ淨土宗ナリト遁ル、ナシ。素ヨリ淨宗ヨリ七雜消滅廣濟衆厄ノ選要ナル念佛ナル故當時百年昇平念佛祈禱ノ力ナルヲ我宗ニ祈禱ナキト申ハ他宗ニ力ヲ與ヘ我宗ヲ陵蔑スル佛外道ナリ。選集并ニ記誦文ハ世モ法モ諸緣ヲ放下シテ專修一行ニ結歸スル出家在家ノ行者ニ教ル也

往生之業念佛爲先ト云、又往生極樂ノ爲ニスト能別ノ言ハ置玉フヲ出家在家トモ結緣萬事如此ニ教ルニ非ズト出家荷法ノ人ハ釋迦ノ教ヲ進退スルヲ別ニ教ヘ玉フニ不及故也

其遁世專修ノ行者ト稱スルハ世ヲ遁レ關通知キ隱者コソ諸緣廢却念佛一行ニ結歸シ見佛等ノ好相ヲ求ムベケレバ彼僧モ自ラ口ニハ專修ヲ勸メテ

持齋ナドシテ沙門ノ行ヲナシ 彼ガ所謂 雜行 是一

江戸時代に於ける佛教界の肅正様相

齋會ノ家ニ赴

〃 是二

綸旨ヲ得現世ノ祈ベキ勅命ニ違ス

〃 是三

努力シテ說法

〃 是四

無益ノ書述世ニ行

〃 是五

寺ヲ建立ス

〃 是六

推シテ人ヲ勸メテ多度シテ僧ニスルヲ

〃 是七

是等ノ行、選擇集ノ何處ニ有リト爲スヤ、人ヲ專修ト勸メテ自ラ專修ナラザラルハ如何、無顧ノ惡人此人ニ非ズヤ、在家ヲ專修ト勸ムルハ世人裏山エ入テ諸緣ヲ捨テヨト勸ムル意ナリヤ。然ラバ國制ニ背ク大罪也。在家不レ苦勸テ專修ニ結歸セバ一向宗ノ勸メニ無^レ異事、佛神ノ餘緣悉ク嫌ヒ捨テ、活世造惡ノ結緣ヲ許ス^レ甚ダ宗ニ違セル勸也。僧侶信伏シテ黨ヲ爲スヲ甚ダ未審、將タ密カニ魔事ニテモ修スルヲニヤ、知識多ク是ヲ疑フ具眼ノ人彼僧誑惑ナル明ニ知ベシ

(以上)

右の妄教化箇條の第二條、第三條の地藏觀音餘尊を禮することを關通が廢せしめたといふ。文雄の『甄陶篇』の七丁右に善導の清淨大海衆の言を引いて駁せると相一致している、然し關通の著によれば河へ流さしめるが如きは無かつたようである。

『燧囊讚歎章』十七丁右に「念佛は一切諸佛如來の名號を唱うると齊しければ格別の必要なし」との思想を述べ「一枚起請文梗概聞書下」(淨全卷九、二二六頁)には最も適切に論じている。

「念佛者は餘法餘尊を捨てて毀らず貴びて用いざるべし」

という態度である。文雄に駁論をなさんが爲めに過激に言っている點は、上掲の入信院の文書と相共通している。

また第四條の施餓鬼排斥は事實であつたが此れに對して『專雜甄陶篇』廿四丁左三行に

「施食、法蓮門普修毋ニ廻不雜」與謂佛門之通軌禪教顯密普修^ス」

との理由を以て駁せり。入信院文書と文雄の所論とは相通の氣脈ありたる如きも入信院文書には其の年月人名を缺く爲に果して誰の手になるや斷言し難し。然し入信院には前掲の關通の『本願念佛勸化本義』があつてそれに文雄が一々駁を書き細注を入れている。されば上掲の「關通不退妄教化」なる文書も、勸化本義本と共に入信院に入つて來たものではあるまいか。

偕て文雄の住持せる京極の了蓮寺（現在は百萬遍内に移転して來ている）も百萬遍祈禱勸願所知恩寺の末寺であることは前記の大我と共通の立場であることを想い合ふべきである。

文雄は同志である大我の『問津決』を『甄陶篇』に引いて來て專修不祈禱を駁しているのも大我と相通じている點である。

次に文雄が敬首に對面したことに觸れておこう。敬首は關通の律における師であつた。

『甄陶篇』の廿三丁終二行に「法俗不受戒不釋中之人（乃至執ニ一行ニ廢ニ餘行^ニ）という説をあげ、かく唱える或師がある。その文雄がある師と言えるは、弟子文龍が故師（文雄）の心は敬首を指していると、傍註を施しているのである。そしてその説に對して「謂如^レ所^レ聞非^ニ吉水之徒^ニ」ときめつけて、尸羅の極難は淨土易行の宗義に合せないと云っている。

ところで敬首が元文五年庚申夏四月下旬に出した『淨土解行鈔』の中に

問 今時淨土宗と名つく者の剃髪はすれ共、受戒をば嫌いて受けず、肉は頗るたしなへとも酒五辛をば服用す。衣は着すれども袈裟をばはしらず。五種の正行にあらぬ施餓鬼をなし、寺塔を建立す。これにても吉水の流義なりや。

答 予は世の淨土宗を不知、故に是非すべき様なし、然れとも尺八を吹いても禪宗と名のり日蓮が徒も法華の行者と思ひ、刀杖を帶し兜巾を頂きても眞言の行者と呼び、肉食妻帶しても出家かと思ふ。至愚あれば上に下の隨う如きの身持にても淨土宗と思つて終身ゆめにて一棺の土となる者もあるべし。怪しむに足らぬとなりと當時の教界を皮肉り、更に最後に

「諸教立義不同委しく記せるものなし、故にあらあら之を記す。淨土宗の中に於ても難行易行のあることをしるせるものなし。因に之を辯じて初心修業を濟う者なり。

と、其の説くところは持戒を勸め念佛門については廢立爲正のたてまえであつた。

ところで文雄の住せし了蓮寺には右の敬首著『淨土解行鈔』を文雄が自ら書寫して其の次に文雄自ら著述せんとする『淨土解行鈔正訛章』を付けた書冊が藏せられている。駁論書である。その中で文雄は

「吉水の教は必ずしも戒行具足せざれば往生せずと教え玉うにはあらず。隨分に護持すべきなりと示し下へり。末法は戒力のつとめ難きこと、日本圓頓戒の元祖たる傳教大師聖道の人師として千歳已上の明鑑云々」

と云ひ、また

「偶ま淨土の門閥に入れども吉水の祖訓を斥い好んで奇説を吐て愚人を驚かす。唯是名利鉤るの謀計にして厭穢欣淨の正信に毫もあることなし」

と。敬首と文雄との思考は照合してみても全く隔絶していたのである。尙ほ大乘佛説論についてもこの兩者は意見が相反していた。

さて淨土宗に於て施餓鬼會を修することを上既に論難しているが、元祖法然上人には施餓鬼會について、述べられてあるを未だ知らない。先年嵯峨正定院藏書中に『裸辨』慈雲著あるを知る。此の慈雲は眞言の慈雲尊者飲光ではない。京洛西光寺住とあるも傳記は未解である。鎮流祖傳の慈雲ならば菅原爲長の息にてそれでは鎌倉時代まで遡り餘りに古すぎる感がある。兎まれその著書には淨土宗にて施餓鬼會を修することは難行難修であるからといって極力排斥すべしと論じている。此の嵯峨正定院は東山一心院の末寺でもともと捨世派に屬していて、専修念佛を唱道し、施餓鬼會などは排除して來た爲めであらう。

第四節 批判

さて文雄等が現世祈禱を主唱する所以は四恩報答を高調し皇帝永固武運長久を志しているし、是れを排斥する反對派に對しては忘恩者または凶首と罵倒しているのである。處で幕府から現世祈禱——特に武運長久ということを示したのであらうか。淨土宗に對しては其の沙汰はないが、眞言宗に下した元和條目には明かに祈禱を制定している。また寛文己酉（九年）正月四日井伊兵部少輔へ御渡されし條令には次の如く御朱印寺に於ては祈禱を行わしめられたのである。即ち憲教類典によるに

寛文己酉年正月四日

井伊兵部少輔殿 御渡

御目付江

諸國御朱印之寺社領於五穀豐熟萬民安穩之儀一統にて可遂祈禱候、尤守札護符様之品施行候も勝手次第にて候
江戸時代に於ける佛教界の齋正様相

旨被仰出候、并先年淺間山燒奥羽飢饉疫病且關東出水京都火災等にて下々失亡致し候も不少旨相聞候に付、向寄之寺院におゐては此度施餓鬼修行可致旨被申付候、私領にても是に順し候儀有之候はゞ右之心得を以申付在之可然儀に候間向に被寄にて被達候

また全じ寛文九年「増上寺より發せる覺書」と云うもの淨土宗全書（卷二十・一〇七頁）に収められているが其の第一條に

一、法事之儀千部讀經或は五百部三百部等又別時念佛は四千八百或は七日等の念佛其外頓寫施餓鬼等何も檀方之次第可^レ有^ニ執行^ニ云々

とあつて關通一派が雜行雜修として排除した施餓鬼會等も「檀方之次第」という様に認めて幕府の現世祈禱の志趣に迎合して行われたようである。されば上掲する如く關通一派が宗祖の昔に復して一向專修を以て革新運動を興した際に或は法賊或は、妄教化と罵倒され、或は閉戸の處分を受けることになつたのも、よくよく考えると御朱印寺などでは幕府の命をうけて高僧は盛んに施餓鬼などを修していたからである。

第五節 革新運動と官僧 安逸を貪らんとする寺僧に對し革新肅正を志す律僧たちは自ら嚴格な律儀を守り或は宗祖に或は遠く釋尊の正法に還えさんと奮闘したのである。然し大寺にあつて恬怛とし安易に生活し利益と名望に浮身をやつせし僧侶には是等の革新運動者を「普通の僧侶の行儀ではない、一種の奇を好むもの、或は衒學者である」と貶して自ら肅正を計ろうとはしなかつた。また律院在住者は開創者の苦心のことを忘れたゞ型のみを續けるという活氣のないものに墮して行つたのである。

戒律運動の盛んであつた享保より寶曆年間に亘つて學德兼備の名聲の高かつた佛定は（淨土宗全卷十八、三四七頁）

「今時官僧というものは無戒のやうにおもひ嬌肉を斷ずる戒なるものを忘れ、たま／＼律僧に對すれば別なるものゝやうに心得たり。それゆゑに在俗のもの官僧を見ること塵芥の如し。たとひ持戒如法の僧にても鼠色ねずみいろの法衣ほふえならでは無戒の看をなし白眼にて見るなり。

その律僧というものも開遮持犯も委しからず、たゞ晩食をやめたるのみにて増上慢心を發し、天下の老大知識をも輕賤し云々」

と更に言をつづけて

「今時頑愚なる律僧などの官僧を讐敵の如くにくめるもの多し（乃至）この邪見をすくうにも官僧のまゝにて持戒清淨なるがよきなり」

とはまことに穩當な所斷というべきである。官僧といい律僧といい各自特別の意識をとり除いて謙虛に持戒稱名することが僧侶の本分であるというべきであり、そうすることが淨土宗の教界肅正に奏功したことであらう。

（昭和四三・七・二五）

